

日本女子サッカーにおける女子選手登録者数と日本女子サッカーリーグ協賛会社数の相関に関する研究

A study of the correlation between the number of registered women's soccer players and sponsoring companies for Japan women's soccer league

1K03B021-8

伊藤 絢子

指導教員

主査 間野義之先生

副査 石井昌幸先生

< 目的 >

2004 年のアテネ・オリンピックでの健闘を機に注目を集め始めている女子サッカーであるが、2007 年 6 月に、日本サッカー協会より強化と普及に向け「なでしこ Vision」が策定された。2015 年に向けた目標が掲げられ、またその達成に向けた重要施策が明記されたこの「なでしこ Vision」は今後日本女子サッカー発展のための基盤となってくると考えられる。

しかし、1989 年より開幕した日本女子サッカーリーグは、その設立当初より企業の業績に左右されやすいコーポレート・アイデンティティー型の経営を行ってきた。1998 年には不況のあおりを受け、多くのチームが廃部となり、また経営の困難さから無料試合が今なお慣行されているのが現状である。

そこで本稿では、なでしこ Vision により増加目標が掲げられている JFA 女子選手登録者数と、安定的なスポーツ経営には欠かせない日本女子サッカーリーグ協賛会社数との変遷とその相関を証明し、「なでしこ Vision」の目的と成立を調査することで、日本女子サッカーリーグがより安定的で継続可能なリーグとなっていくための課題を明らかにし、またその解決策を導き出すことを目的としている。

< 方法 >

協賛会社数と JFA 女子選手登録者数の増減の変遷を比較・検討し、X 軸を JFA 女子選手登録者数、また Y 軸を日本女子サッカーリーグ協賛会社数とすることで、SPSS を用い相関分析を行いその相関を証明した。加えて、年度別の女子日本代表の FIFA 女子ワールドカップ、オリンピックなどの成績やその動向を上記の年度別データと照合を行った。

また、「なでしこ Vision」の成立、その目的を明らかにするために、元 JFA 女子委員・小林美由紀氏に対談方式のインタビュー調査を行った。

< 結果・考察 >

1990 年から 2006 年までの 17 年間の間、この協賛会社数、選手登録者数の二つの数値は、2002 年から 2004 年までの 3 年間を除き、ほぼ同時期に増減を示している。相関分析の結果、 $r=0.726$ (小数点第

四位以下切捨て)となり、JFA 女子選手登録者数と、日本女子サッカーリーグへの協賛会社数の両者の間に、統計的にみて強い正の相関があることが証明できた。つまり選手数が増加してゆくことは、協賛会社の増加を導く可能性があると考えられる。また、女子日本代表の動向と照合することで、特にオリンピック出場の年と、その前後 1~2 年の間に選手数に大きな増加が見られることが分かった。

また小林氏へのインタビューにより、日本女子サッカーの持つイメージの改革の必要性和、女子サッカーが盛んなアメリカでは多く見られる、「サッカーマム」のようなロールモデルを日本人選手の中から生み出し支えていく努力が必要であることがわかった。

< 結論 >

研究結果より、日本女子サッカー界の課題として、選手数の増加を果たし、安定的な協賛会社を獲得するために、今日本女子サッカー界には以下 4 つの事が求められていると考える。「①女子サッカー環境の整備。②オリンピックに必ず出場すること。③人材育成。④ロールモデルの支援とイメージの改善。」特に、女子サッカーにおいて、オリンピックにあたる年度にかなりの選手数の増加が見受けられる。世間からの期待と注目が一気に上がるこの時期に、いかに女子サッカーの魅力を伝え、日本代表選手唯一の「サッカーマム」である宮本選手のようなロールモデルを露出していけるかが、より多くの人に興味をもってもらいことにつながり、選手数の増加を導き出せると考えられる。こうした取り組みと努力が今後必要不可欠であると、調査結果、先行研究またインタビュー調査などからわかった。

今日、日本女子サッカー界に求められているのは、そのイメージの改善と、女性からまた少女から憧れとされるようなロールモデルを生み出していく努力であり、そして、それを露出できるオリンピックなどの機会の確保である。こうした努力の末に、女子サッカーに興味を持つ人を増やし、安定的で継続可能な女子サッカーリーグ経営となっていくのではないかと結論づけた。